

マタイによる福音書7章13-14節 「狭き門」

1A 御国への三つの招き

2A 狭い門 13

1B パリサイ人や律法学者にまさる義

2B ユダヤ人の考えた救い

1C アブラハムの子孫

2C 外側の律法の行い

3B 心の貧しき者

1C 神にしかない救い

2C イエスを主と信じ、受け入れる者

4B 「入る」努力

3A 広い門 13

1B 滅びに至る道 箴言 14:12

2B 歩く人が多い道

4A いのちに至る門 14

1B 狭さ： 金持ちの青年への言葉

2B 細い道： 最後まで確信

3B 見出す者： 尋ね求める者

本文

マタイによる福音書7章を開いてください。私たちの山上の垂訓のシリーズは、イエス様の説教の最後、招きの部分に入っています。13-14節を見てください、「**13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。14 いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。**」

1A 御国への三つの招き

私たちは前回、イエス様が、これまでのご自身の説教をまとめておられた部分を読みました。「7:12 ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。」律法と預言者については、5章17節で、ご自身が律法や預言者を博するために来たのではなく、成就するために来たのだと言われてからずっと話されていることです。神が律法を与え、預言を与えられたその精神というか、真意をイエス様はずと説き明かされてきました。それをまとめるにあたって、「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。」ということなのです。宗教においては、「してほしくないことは、してはいけない」という戒律はよくありますが、イエス様が神の国の市民として私たちが生きるためには、そういった消極的、

あるいは恐れによってと言ってもよいでしょうか反応するのではなく、愛によって応答する、具体的に良い行いをしていくことが、律法と預言のエッセンス、本質なのだということです。

ここまでお語りになって、主は、人々に招きを行われます。最後に、これまで教えられたことを実践に移すことを呼びかけられているのです。三つの招きを行われますが、一つは、「狭い門から入りなさい」であります。滅びに至る広い門と、いのちに至る狭い門があるから、その狭い門から入りなさいということです。二つ目は、偽預言者たちに用心しなさいということです。15 節から 23 節で語られています。その広い門から入るように、偽預言者たち、偽教師たちは教えていきます。その見分けは、結ばれた実を見ればわかるということです。そして三つ目、最後は、岩の上に家を建てなさい、という言葉です。24 節からです。御言葉を聞いて行う者が、岩の上に建てています。聞いても行わない者は、砂の上に家を建てています。

2A 狭い門 13

そして最後に、聞いていた群衆はその教えに驚いた、とあります。それは、律法学者のようではなく、権威ある者として教えられていたからだとあります。イエス様は、広い門というのは、彼らが教えている道であるということを示唆しておられます。そして偽預言者というの、滅びに至らせる偽りの教えを彼らが教えているということを言外に含んでおられます。そして、最後に、真剣に御言葉を自分のこととして受け止め、当てはめているかどうか、聞いているすべての人に問いかけられるのです。ユダヤ人一般にとって、律法学者が教えていることが教えの基準であることは当たり前です。そしてそうした教師たちが影響力を持ち、支配しているユダヤ人の共同体の中にも、当たり前です。けれども、イエス様は、「狭い門から入りなさい」と言われることによって、「あなた方は、主体的にわたしを主とすることを選び取りなさい。」と呼びかけておられるのです。

聖書は、最後に、二つの道があり、そのどちらかしかないことを教えています。律法において、モーセが最後の説教をした申命記では、最後のほうでこう問いかけています。「申命記 30:19-20a 私は今日、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、【主】を愛し、御声に聞き従い、主にすがるためである。」聖書の最後、黙示録も、いのちの道か、滅びの道かの二つだけなのだといエス様が教えておられます。「22:14-15 自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。犬ども、魔術を行う者、淫らなことを行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は、外にとどめられる。」

私たちは、どうしても、「何も決断しなければ、どちらの道でもない、中庸だ。」と思ってしまいます。けれども、実はそうではないと教えているのが、今、読んだ、「狭い門から入りなさい」という呼びかけです。どちらでもないというのは、まさに、そのまま広い門に入っていくことを意味していま

す。漫然としていること、特段に決断していないことは、そのまま滅びへの道を進んでいるのだということです。ですから、モーセが説いたように、「いのちを選びなさい」という、自分自身の決断が必要になるのです。

ところで、イエス様が語られた広い門と、狭い門というのは、すぐに目に浮かぶような光景です。エルサレムなど、町は城壁に囲まれています。それぞれに門があり、そこから道が通っています。人々が門から入り、その道を進んでいきます。ローマ時代には、エルサレムは他のローマ時代の町と同じように、東西南北の主要な街路がそれぞれ一つずつありました。南北のをカルドと呼んでいます。そういったところは人々がたくさん行き交っています。けれども、誰も気づかないところに、隠れたようなところに小さな門があり、また一人しか通れないかもしれないような狭い道もありました。それが狭い門と細い道ですね。イエス様は、こちらから入りなさいと命じられたのです。

1B パリサイ人や律法学者にまさる義

なぜもって、イエス様は狭いほうから入りなさいと言われるのでしょうか？説教の初めのところ 5章 20 節で、「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」と言われていました。彼らの義こそが、ユダヤ人が神の国に入れる義だと思っていたのですから、それだと絶対に入れない、救われないと言っているのですから、度肝を抜きます。

2B ユダヤ人の考えた救い

1C アブラハムの子孫

彼らの中では、基本、アブラハムの子孫であればそのまま、神の国に入ると思っていました。血縁でアブラハムの子孫であることと、また生後八日目の割礼が、アブラハムの子孫であることの印でありました。それで、救われるという考えがありました。

2C 外側の律法の行い

それから、律法学者が解釈するように、モーセの律法を守ることが求められていたのですが、それらの解釈が、いかに人々を滅びへと向かわせているか、イエス様はそこから説いていかれたのです。「人を殺してはならない」という教えを、イエス様は兄弟に馬鹿といたら最高法院に連れていかれる。「姦淫してはいけない」を、心の中で情欲を抱いたら、火と硫黄の池に投げ込まれる。こういうことを語られて、パリサイ人たちが行っている良い行いでさえ、それは人に見せるためであるとし、父なる神に見られるように、隠れて行いなさいとまで言われました。

3B 心の貧しき者

ここから見てくるものは何でしょうか？そうです、「全く自分は、神の前に罪人だ」ということです。外側は清めるが、内側は汚れと悪意でいっぱいだということです。パリサイ人たちが教える戒めは、

非常に厳しいようで、実は、自分たちが何とか守れるように少しずつ細工しており、また人の目には律法を行っているかのように見えるように、そのうぬぼれや高慢は放置されたままです。

1C 神にしかない救い

こういったことから、主は、山上の説教を「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」という言葉から始められたのです。人は悪に傾き、罪を犯さざるを得ない、墮落した存在だ。まったく自分には良いところがないという悟りによって、神にしか救いがないと、神の憐れみを求める者こそが、救われるということです。祈りについてイエス様が教えられた時、パリサイ人の祈りではなく、取税人が、「罪人の私を憐れんでください」と祈った、あの祈りによって、その取税人は義と認められたと教えられましたね。

2C イエスを主と信じ、受け入れる者

ですから、イエス様のところに行くこと、この方を自分の主と信じ、受け入れ、その後もイエス様にこそ命があるとして、より頼んでいくことこそが狭い門から入り、その細い道を歩くことにほかなりません。パンを求めてついてきた群衆が、「神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」と尋ねたら、「神が遣わしたものをあなたがたが信じること。それが神のわざです。」と答えられました(ヨハネ 6:29)。パンを求めたり、他の物を求めて、それでイエス様を信じるのではなく、パンもすべてどんなことも、ただイエス様を見て、この方についていくことが、信じるということです。全人格をもって、全幅の信頼を寄せることです。

4B 「入る」努力

この、「**入りなさい**」と言われていますが、ここは、悩むとか、もたえるとか、努力するとか、そういった意味合いがあります。つまり、自分を否むということです。十字架のところに行くことは、自分に救いがないことを認めることであり、自分の罪を認めることであり、自分を否むことなしにはイエスを信じることはできないからです。「ガラテヤ 2:21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」

3A 広い門 13

次に、「**滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。**」と言われています。

1B 滅びに至る道 箴言 14:12

これは、「**滅び**」に至る門です。滅びとは、単になくなることではありません。自分のしたことに対して報いを受け、その苦しみの中に生きる場所です。マタイ 25 章 41 節には、「わたしから離れ、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。」とあります。悪魔とその使いのために用意されていたのですが、神とその福音を拒み、自ら偽りを選び取っている人は自分で選んで滅び

を刈り取ることになります。

狭い門は、イエスを信じることであることを見ましたが、広い門とは自分を信じることだとも言えます。箴言 14 章 12 節を読みます、「人の目にはまっすぐに見えるが、その終わりが死となる道がある。」人の目には正しく、まっすぐに見えるのです。普通に漫然と考えていれば、その思いや気持ちは、それは正しいとみなしています。しかし、その終わりは死となるということです。なので、そこに入っていく者が多いとあります。

2B 歩く人が多い道

そして、ここで、「**そこから入って行く者が多いのです**」と主は言われていますね。多くの人々が、左を歩いているのに自分だけが右を歩くようなものです。今、山上の説教シリーズで、著名なイギリスの説教者ロイド・ジョーンズの著作を参考にしていますが、こう書いてあります。「私たちは皆、強く「ならわし」の奴隷となっている。私たちは言い伝えや習慣や風習などに取り囲まれた社会に住んでいて、それらに合わせて生きようとする。それは、しやすく、わかりやすい生き方である。例外的で人と違った生き方をすることほど、私たちがきらいなことではない。・・私たちのだれもがこの傾向を持つ。その結果、キリスト者になると、それとともに必ず例外的で異例な存在となる。」¹

この文章を読んで笑ってしまいました。私がいつも、「クリスチャンって、変！」と言っていること、そのものだからです。例えば、9 年前の東日本大震災の後、福島で原発事故が起こって、成田空港では出発ロビーに、逃げようとする人々でごった返している時に、到着ロビーには海外から被災地で助けにくるために、クリスチャンたちがどっと降り立っていた、というようなことです。キリストの愛と情熱は、私たちに、真実な意味の冷静さを与えます。人々は、「こんなのおかしいだろ！」と怒るかもしれないようなことであっても、実は世間全体がおかしくなっているところに、冷静に慎む深く行動しているということです。

4A いのちに至る門 14

そして 14 節を見ましょう、「**いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。**」

1B 狭さ：金持ちの青年への言葉

イエス様が、「**なんと狭く**」と強調しておられますね。そこで思い出すのは、金持ちの青年です。彼はイエス様に、「良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」と問いかけます。十戒の後半部分、「殺してはならない、姦淫してはならない、偽りの証言をしてはならない、あなたの父と母を敬え。」とイエス様が言われると、「少年のころから、それらすべてを守ってきました。」と言いました。イエス様はいつくしんで、「あなたが持っている物をすべて売り払い、

¹ 「山上の説教 下巻」343,345 頁

貧しい人たちに分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。」と言われたのです。彼は大金持ちだったので、悲しんで立ち去ったのです。そして弟子たちに言われました、「ルカ 18:25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」らくだが針の穴を通るほうが、金持ちが神の国に入るより、易しいのですから、そりゃあ、狭い門ですね。弟子たちは、それではだれが救われるのだろうか？と驚くと、「人にはできないことが、神にはできるのです。」と言われました。そうです、狭い門とは、初めから終わりまで、神に期待して、神に信頼する道です。神にはできる、と告白していく道です。

2B 細い道：最後まで確信

イエス様は、「道もなんと細いことでしょう」と言われていますね。門も狭かったけれども、その後の道もずっと細いということです。聖書では、残念ながら初めに信仰を持ったはずなのに、そこから離れる話が多く出てきます。イスラエルの民は共にエジプトを出たのに、荒野で死に絶えた人たちが大勢出てきました。実に古い世代はみな、荒野で死に絶えました。サウルは、神に従っていたようで、最後は魔女に頼りました。ソロモンは、主を愛していましたが、晩年は女を愛し、それゆえ神々を拝むことを許してしまいました。

信じることには、忍耐がともないます。忍耐とはいわゆる我慢することではありません。忍耐は、目で見るところでは落ち込むようなことが起こっていても、それでもなおのこと、神が言われたということだけで、それで信じて、期待することです。「ヘブル 3:6 しかしキリストは、御子として神の家を治めることに忠実でした。そして、私たちが神の家です。もし確信と、希望による誇りを持ち続けさえすれば、そうなのです。」確信と、希望による誇りを持ち続けることです。持つだけでなく、持ち続けることです。主にまみえるまで、忍耐して信じ続けることです。

特に、山上の垂訓においては、弟子たちは、「義のゆえに迫害を受ける」ことが教えられています。世において困難があることを教えられています。神に仕えているとしている者たちからさえ、迫害を受けることがあります。初代教会は、ユダヤ人と同じ会堂を使っていたのに、イエス様を信じ、異邦人を受け入れているがゆえに、追い出されました。けれども、わたしの名を否まなかったから、わたしが戸を開けておくと約束されました。フィラデルフィアにある教会です。(黙示 3 章)

3B 見出す者：尋ね求める者

そして、「それを見出す者はわずかです」と言われました。漫然としていたら、そこに道があるけれども、ある事さえ気づきません。つまり、求めること、捜すことが必要とされるのです。イエス様は、求めれば与えられる、捜せば見つかる約束してくださいました。

ここで多くが問われています。このあとで、偽預言者に対する警告で、実が結ばれているかどうかで見分けることができることを語られます。多くが主よ、と言いつつも、御心を行っていないと

して退けられる者たちも多くいます。また、みことばを漫然と聞いているだけで、砂の上に建てられた家のように、洪水で押し流される者もいます。その違いは何か？と問いますと、探し求めているかどうかにかかっています。多くの方は群衆と同じように、驚いたり、感動さえします。けれども、その反応で終わってしまうのです。けれども、「今の自分の生活の中でいったい、語られたことがどのような意味を持つのか？どう適用するのか？」ここまで探し求めて、それで神に語られたことに従う、とうとろまでいかないと、その信仰には実が伴いません。

主の呼びかけに応えましょう、狭い門から入り、細い道を歩んでいきましょう。